

## 授業で聞いた、三好さんの阪神淡路大震災のお話で印象に残ったこと、感想

地震というものは、予想より厳しく発生する可能性が大きくて、そしていつ来るのがわからないため、本当の地震を経験したことがない人にとっては、いろいろな防災知識を勉強しても、色々な準備をしても、本当に地震が発生する場合には想像できない、予測できないほど厳しい状況が出る可能性も少なくないと思う。例えば避難器具を使用する時間がないとか、緊急用具が燃やされたとか、どこかのガスコンロが漏れたとか、予想できない状況は、少なくないと思うので、防災意識の育むや模擬防災を大事にしなければならないと考えている

三好さんの阪神淡路大震災に関する授業で、先生は地震当時の事例や写真を紹介し、『神戸新聞の7日間』の映像も視聴した。その内容を通じて、防災を学ぶことの大切さを強く実感した。理論の知識を学ぶだけではなくて、実際の写真や体験談から学ぶことで、災害についてより深く理解できた。また、新聞紙を使って簡単なスリッパを作り、足を守る方法も学んだ。最後に災害の前では人間は弱い存在であり、互いに助け合い共生していくことが何より大事だと学んだ。今後は、自分自身も日頃から防災意識を持ち、災害時に落ち着いて行動できるよう備えていきたい。

第四回の多文化と防災の授業では、三好先生は阪神淡路大震災の背景、新聞社の角度から、いろいろなことを私たちに紹介してくれました。私は一番印象深いことは、いくつがあります、まずは、授業の最初の際、神戸新聞社に関わる映画です、この映画は阪神淡路大震災が発生する前に、神戸新聞社の一般人の物語、および大震災が発生するとき、すごいインパクトを皆さんに与えます。そして、印象深いのは、授業中の、地震が発生するとき、どうやって、家族や友達のことを守るのかというテーマをそれぞれ発表しました。私は家族に事前に地震の危害と防災についての知識を伝えなければならないと思う、だが、家族と一緒に、防災館に地震の模擬体験に行くつもりだという答えがあります。確かに、それは家族にすぐに地震の危険を意識できるようになります。なんか勉強になりました。最後、先生が地震発生する時に、新聞紙で簡易スリッパを作る方法を教えてくださいました。地震で飛び散った破片のせいで、怪我しないように、とても役立つ知識だと感じます。今回の授業を通じて、たくさん学びました

今回の授業で、三好先生の阪神淡路大震災のお話を聞いて、とても感動しました。

まず、地震の怖さと備えの大切さを改めて強く感じました。資料にあったように、懐中電灯や薬などを準備しておくことは、自分の命を守るためにとても重要だと思います。一番心に残ったのは、大きな地震の中でも、現場で記録を続けた記者の方々の姿です。とても危ない状況なのに、逃げずに第一で真実を伝えようとする勇氣は、本当にすごいと思いました。普通の人なら怖くて逃げ出してしまうような場所で、前線に立って記録し続けるのは、とても立派なことです。

このような記者たちの記録があるからこそ、私たちは震災の恐ろしさを知り、未来の準備をすることができます。私も、どんなに大変な時でも、自分の役割をしっかりと果たし、社会に貢献できるような強い人間（教師など）になりたいと強く思いました。

日本は本当に災害が発生しやすい国です。三好さんの阪神淡路大震災のお話で印象に残ったことは、震度6以上の地震は想像より大きいです。ガラスも一瞬間割れるし、夢の中や会社で働く時にも大きい地震が発生する時も逃げる時間がないそうです。ちょっと怖いと感じました。大阪って地震も発生する可能性があるって気づいた。発生した地震を子供に続く伝えていくことが必要です。中国にはあまり地震がないので、そういう警戒心が少ない、もし一旦地震が発生したら、ゆっくり逃げることがないです。念の為、災害に逃げられる準備をしておく方がいいと思います。

阪神淡路大震災の記録を見て最も印象に残ったのは、想像を絶する被害の中でも失われなかった「人の温もり」と「共助の精神」だ。

特に、自分自身も被災している身でありながら、周りの高齢者や子供のために炊き出しを行ったり、声を掛け合ったりした人々の姿には深く心を打たれた。また、全国から多くのボランティアが駆けつけ、「ボランティア元年」と呼ばれるきっかけになったことも、困難な状況下での連帯感の強さを象徴していると感じる。

一方で、倒壊したビルや火災の映像からは、都市の脆弱さと自然災害の恐ろしさを痛感した。昨日まで当たり前だった日常が一瞬で奪われる現実、決して他人事ではない。この震災の教訓を風化させず、日頃から防災意識を高めて備えを怠らないことが、今を生きる私たちに課せられた重要な責任だと思った。

第4回の授業で、三好さんから阪神淡路大震災のお話を聞きました。実際に震災を体験した方の話を直接聞いたので、とても心に残りました。

私は今まで、地震のことを教科書でしか学んだことがなく、本当の怖さや大変さをよく分かっていませんでした。三好さんの話を聞いて、地震が突然起きた時の揺れの恐ろしさ、電気や水道が止まって生活がとても苦しくなったこと、情報がすぐに手に入らなくて不安だったことがよく伝わってきました。

また、被災した人たちがお互いに助け合って困難を乗り越えたという話に、強く感動しました。授業では、地震が起きた時の対処の仕方や、非常持ち出し袋の用意、多言語で使える災害情報アプリについても教えていただきました。

私は留学生として日本で生活しているので、これからは地震への備えをしっかりと、冷静に行動できるようにしたいです。今回の授業は、防災の大切さを強く感じる、とても有意義な時間になりました。

インターネットで調べれば、震災の全体像や死者数、倒壊棟数といった数字はすぐに見つかる。しかし、三好さんが今回紹介してくださったのは、そうした数字だけではない。ネットでは簡単に知ることのできない、災害時における一人一人の具体的な行動や体験したことについても、たくさん話してくださった。例えば、今回の授業の最後に、一部の犠牲者の名前と彼らの物語を語ってくださった。災害で亡くなったのは一つ一つの数字ではなく、確かに生きていた一人一人の命だと痛感した。

その中で、震災の翌日、両親も姉妹も失ったその小学校6年だった女の子のことが特に印象深い。彼女はどんな絶望を体験したのか想像できない。もしそれを体験したのは私なら、もう生きたくなくなるかもしれない。しかし、この子は本当にとてもたくましく、家族の分まで生きて、立派な人になった。この子の立ち向かう姿に心を打たれた。

また、当時の新聞には、普段なら決して載せないような「誰かが結婚しました」「どこかでお風呂が出来る」という知らせがあえて掲載されていたことも、とても印象深い。それは被災者の日常が一瞬で奪われる中で、たとえ小さな幸せでもそれを伝えることが、読者に寄り添い、希望を届けることにつながると、三好さんや新聞社の皆が考えられたからである。このことも、小学校6年生だった女の子のことも、どちらも「災害の悲惨さ」だけに目を向けるのではなく、その中で懸命に生きようとする人や、未来へ進もうとする人の姿を大切にしている点である。かつて三好さん自身が、新聞社の一員として読者に励まし、寄り添いながら安心安全な情報を伝えたいと願っておられたように、今回の授業でも、私たちに寄り添うようにして、災害の悲惨さに着目するだけでなく、災害時の愛と希望にも目を向け、それをたくさん伝えてくださった。

最後に、三好さんの今回の授業のテーマは「語り継ぐ」ということだよ。本当に「語り継ぐ」ためには、死者数や倒壊棟数といった数字だけを伝えればいいのではないと、この授業を聞いた後に強く意識した。あの日、確かに息をしていた人々の声に耳を傾けると、誰もが「命の尊さ」や、「そばにいるのが当たり前になっている大切な人の存在」を改めて考えずにはいられない。そしてそれは、いつ来るかわからない次の災害への心理的な防災にもつながっていく。それこそが、本当の「語り継ぐ」ということだと、私は心からそう思う。三好さんが真面目で丁寧に準備してくださった今回の授業、心から感謝致したいと思う。とても勉強になった。

今回三好さんの話を聞いて一番印象に残ったのは、揺れて止まったら、最も最初に連絡したのは家族ではなく、新聞会社の同僚だったこと。「家族の状況より、早くこのメッセージをみんなに伝えなきゃ」という姿がすごくかっこよかった。また、小学生で家族全員失い、高校生になってやっと前に向けるようになった女の子の話と、ビルが完全に倒れている写真ですごく衝撃を受けた。

「地震でなんでも起こるんだ」と考えた。授業中に、私が阪神大震災のような大きい地震で生き残れるのでしょうかという不安も生じたが、生き残るのが難しいこそ、経験者の話を聞ける機会がすごく貴重だと考え、ありがたい。

三好さんの阪神淡路大震災のお話を聞いて、特に印象に残ったのは、震災が単なる「過去の出来事」ではなく、人々の人生や心に長く影響を与え続けているという点である。実際に経験した方の言葉には強い重みがあり、ニュースや教科書だけでは分からない現実が伝わってきた。特に、震災を経験した人々の心の傷や、その後も続く不安についてのお話から、防災だけでなく、被災者への長期的な支援や心のケアも大切だと感じた。今回のお話を通して、阪神淡路大震災を「昔の災害」として捉えるのではなく、自分自身にも起こり得る問題として考え、防災意識を高めていきたいと思った。

今回の授業で、地震の実際の経験を聞いて、地震の恐ろしさを改めて知りました。特に、突然大きな揺れが起こり、普段通りの生活が一瞬で変わってしまうことに強い不安を感じました。また、避難生活やライフラインの停止によって、多くの人々が精神的にも身体的にも大きな負担を抱えることを学びました。

さらに、災害時には物資や安全の確保だけでなく、心理面のケアも非常に重要だと感じました。大きな地震を経験した人の中には、不安や恐怖が長く残ってしまう場合もあり、周囲の支えや安心して話せる環境が必要だと思いました。特に子どもや高齢者は精神的な影響を受けやすいため、一人ひとりに寄り添った対応が大切だと感じました。

今回の授業を通して、地震への備えだけでなく、被災した人の心のケアについても考えていきたいと思いました。

今回は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。  
災害を予防するための意識を持つことは、最も大切だと思います。今回のような授業は非常に必要性が高く、今後もこのような機会が増えれば、多くの人にとってとても役に立つと感じました。”